

〔事例報告〕

## 高蔵寺ニュータウン石尾台地区コミュニティ の活動事例

吉 田 光 雄

### はじめに

当地域〔高蔵寺ニュータウン石尾台〕は春日井市の東部丘陵、高蔵寺ニュータウンの北東に位置し、入居開始後20年余が経過し、約1,500世帯5,100名が居住している。平成10年5月に入居開始30周年を迎え、約18,000世帯51,000人が住む、高蔵寺ニュータウンの中では開発は遅いが、持ち家主体の地域である。

当地域は、比較的早い時期から地域住民の融和、連携をめざした行事【盆おどり】【ソフトボール大会】などを開催したり、環境美化に取り組む等、新しい住民のふれあいの場づくりをしてきた。こうした努力が少しずつ実を結び、全国から移り住んだ人々の間にも新しいつながりが生まれ、ここで育った子ども達も増えるにつれて、「ここを自分達のふるさとにしよう。自分達の子ども達にすばらしいふるさとを」と考える人も多くなってきた。こうした中でコミュニティ活動も活発になり「ふれあい豊かな、人にやさしい近隣社会づくり」に取り組んでいる。

### 1. 取り組みの概要

以下ではこの取り組みの概要等を記してみることにする。

当地域は、ふれあいの始まりとしての盆おどりを昭和55年の7月に地域内の公園を会

場として、【第1回石尾公園盆おどり大会】を開催した。この盆おどりも年々盛況になり、数年前に開催時期を8月の中旬にした。時期の変更はふるさと志向によるものである。すなわち、お盆の時期になると嫁いだ娘さんや、息子さんがこどもを連れてふるさと帰りをされるタイミングに合わせての開催である。

この取り組みは、地域内外の13町内会、自治会による実行委員会方式をとっており、当年度の町内会、自治会、こども会、老人クラブ、ボランティアグループ、各種サークル等々の人々の出逢の場となり、開催・運営に向けて、何回かの会合を持ち役割分担も行っている。これを受けて、単位組織でも会合が持たれ取り組みがなされる。

例えば、開催資金づくりの寄付金集めは6町内会、自治会が受け持つ。これ迄の実績をもとに、予め実行委員会から協賛金要請文書を届けておき、訪問先を指定する。また、継続性確保の工夫もしている。これらのことが、地域課題の解決への取り組みの開始につながった。

そのテーマを分類すると、概ね以下のようになる。

1. 環境美化、ごみ減量及び分別排出、リサイクル等々。

→生ごみ堆肥化の取り組みも開始。

2. 「石尾台小学校区町内会自治会協議会」

の設立。

3. 「石尾台小学校区体育振興会」の設立。
4. 地域安全への取り組み。
5. コミュニティペーパー「石尾台ニュース」の発行。
6. 小、中学校の週5日制（試行）に対する協力。
7. 他地域、団体の視察／交流対応等々。

また、阪神・淡路大震災をきっかけに災害対策の取り組み〔自主防災会づくり〕更にはシンボルマークの制定、わかしゃち国体民泊協力等々を多くの人々の理解と協力により続けてきた。昭和62年12月には校区内9町内会、自治会の連絡調整を図ることを目標として「石尾台小学校区町内会自治会協議会」が発足した。

その後、設立された町内会、自治会もあり現在は11であり、組の数は110である。

この協議会は順次入居の為に、自然発生的にできた町内会、自治会の連合組織である。同会は規程を策定し、年会費として1世帯あたり120円を全世帯から徴収している。また、春日井市等からの〔助成金〕や〔事業受託金〕等を活用している。

平成3年2月には、春日井市のコミュニティ施策による5番目の「コミュニティ推進地区指定」を受けることになった。その後徐々に推進地区の拡大を図り、平成4年12月には「春日井市コミュニティ推進連絡協議会」も設立し、仲間づくりとレベルアップの為に研修や視察等を毎年継続して実施している。現在は13地区となった。

## 2. 環境問題へのコミットメント

### (1) ゴミ問題と資源回収

この協議会発足を契機として、ごみ問題の取り組みが加速した。以下ではそれについてみてみることにする。

まず【資源回収】に対する取り組みとして平成2年から【空びん回収ボックスの常時設置】の推進を図った。当初2ヵ所で始めた空びん回収ボックス設置場所も現在では26ヵ所となった。

そこには、原則として「スプレー缶回収ボックス」も併設されている。「分ければ資源混ざればごみ」の理念の徹底を図っている。設置場所の増設も今後の課題として取り組んでいる。

毎年1回、地域内の各種団体の参加により【石尾台地区：ごみ問題懇談会】を開催して課題に対する取り組みをしている。

当地区からの空びんの平成9年度回収実績は2,404箱である。この数値は微増傾向にあり、春日井市全体の回収空びんの実績比率の約3%にあたる。春日井市人口の当校区比率（平成10年4月時点）の1.8%を上回り、一定の成果があがっている。

分別排出した空びんがどのようにリサイクルの流れに乗るかを検証する為に以下のようなことを行なった。平成3年10月からこれ迄に断続的にびん工場・製紙工場・発泡スチロールトレイ工場、更には、春日井市クリーンセンター等の訪問を計画し、それを【再生工場等の見学会及び懇談会】として、地域内に参加呼び掛けをし、見学を実施した。なお、見学後は関係項目に関する懇談会を開催している。

## （2）生ごみの堆肥化への取り組み

平成3年11月には【ごみの収集体験】を春日井市清掃事業所の協力を得て行ない、ごみとして出された物を点検した。春日井市のパッカー車と共に、5ヵ所のごみ出し場所を巡回したが、生ごみ、資源となるごみの多さを実感し、地域内での【生ごみの堆肥化】の取り組みを企画した。

まず、第1次として平成3年11月にモニター制度による【土壌還元式コンポスト化容器の設置】を図り、使用についてのアンケート調査も実施した。

この取り組みにあたっては、モニター制度対象機種の選定の為に、他地区へ見学にも出掛けた。モニター制度の為に費用は前記の空きびん回収に対する春日井市の補助金等を活用した。生ごみ堆肥化の第2次段階として、平成5年8月には【密閉容器による堆肥化】を図った。

この取り組みも関係メーカー2社の協力によりモニター制度を取り入れた。当地域の取り組みは、いずれも春日井市による【補助助成制度導入】がきっかけになっており、現在も制度として続いている。

さらに公園清掃が本格化したことにより、飼い主のマナー啓発の為に『犬・猫（の飼育に関する）会議】を平成3年12月に開催した。

そこでの決定事項は次の通りである。

1. 糞は持ち帰る。
2. うるさい時は家の中に入れる。
3. 放し飼いはしない。

このことを『石尾台ニュース』や各種会合において訴えた。

平成3年度に春日井市から【環境美化モデ

ル地区】の指定を受けたことが、広範な取り組みのきっかけとなった。平成4年9月からは【発泡スチロールトレイの常時排出】の取り組みも開始した。

これは、地域にあるスーパーマーケット「ナフコ不二家／石尾台店」の絶大なるご協力によるものである。店頭回収ボックスを2個置かせて頂き、買い物のついでに出して頂く仕組みである。

その結果、常時排出が可能である為、大きな効果をあげている。平成9年度の実績は4,090kgであり、春日井市全体の14.4%であった。当初は出し方のマナーの啓発等も図った。

平成8年6月からは【ペットボトルの常時排出】の取り組みにも協力した。

このことは、平成10年4月に施行された「容器包装に係る分別収集及び再商品化の促進等に関する法律」いわゆる「容器包装リサイクル法」を見据えて、春日井市内3ヵ所のモデル地区指定を図った折りに、その1ヵ所となったもので、地域内21ヵ所に回収ボックスを設置してスタートし、その後、拠点の増設を図り現在26ヵ所になった。目標は地域内のごみ出し場所65の全てへの設置であり、さらなる努力を続けています。

## （3）小結

さて、これらに関する今後の取り組みを列記すると次のようになる。

1. 分別排出の徹底。  
→まぜれば「ごみ」分ければ「資源」
2. リサイクルボックス（びん等回収ボックス）設置場所の拡大。
3. 犬・猫の飼育に関するマナーの再啓発。
4. 再生工場等見学／懇談会の開催。

5. 使用済食用油の収集及び活用。
6. スーパーストアでの買物時に自前の  
【お買物袋】の持参呼び掛け。
7. その他／住民の方々からの提案を取り  
入れる。

これらの継続的な取り組みがテレビや新聞等マスコミ関係の取材対象となった。また、そのことがきっかけで各地から視察や問い合わせ、さらには講演、シンポジウムに於けるパネリストとしての依頼を受ける機会も多くなっている。そしてそれに備えて「石尾台地区に於ける環境美化、ごみ減量、資源リサイクルの取り組み」としてのまとめシートを作成し、対応している。

### 3. 課題への取り組み

#### (1) スポーツ事業へのかかわり

地域のコミュニティづくりと、健康増進を目指して【石尾台小学校区体育振興会設立】の機運が盛り上がった。春日井市教育委員会が社会体育推進の為に、概ね小学校区を単位としての設立を図るものであり、当地区にも働きかけがあり、それを受けての取り組みであった。以下ではそれについて若干触れることにする。

昭和63年10月1日を設立日として、11月23日（勤労感謝の日）に【発会のつどい】を行い、そのことを記念して「ウォーキングいしお」を毎年同日に開催し、これ迄11回行った。コースの設定とガイドは、体育振興会設立の当時の小学校教頭でその後市内の小学校長を最後に定年退職された郷土史研究の先生をお願いしている。

この学区体育振興会をコミュニティの構成団体の一つとして位置づけ、【夏休み親子ラ

ジオ体操】【校区住民運動会】【グランドゴルフ等レクリエーションスポーツの紹介・普及】【スポーツクラブへの支援】等と前述の【ウォーキング】を行っている。当初は【校区住民運動会】として5月に開催していた運動会も平成8年から9月に開催の小学校の運動会にドッキングして開催している。平成元年4月から体育振興会が契約窓口となって春日井市から【石尾公園の清掃と点検】を請け負っている。

何分にも、28,000m<sup>2</sup>もある広い公園なので、容易ではないが、多くの人々の協力により対応している。

これによる事業受託金45万円余はコミュニティ活動資金の大きなウエイトを占めている。

平成元年と2年には小学校のミニバスケットボールチームが全国大会に出場することになり、激励と壮行を行ったこともあった。そしてそれは、設立直後の体育振興会が中心となつての取り組みであった。この選手内の一部が、中学校のバスケットボールチームで活躍し、全国準優勝の榮譽に輝いた。沖縄県に於ける試合の展開とそのエピソードが後述のわかしゃち国体民泊協力とその成果につながった。

#### (2) 学区周辺への「愛のパトロール」の実施

昭和63年5月から6月にかけて、地域において憂慮すべき事態が発生した。小、中学校等に対するいたずらである。

この再発防止に【愛の（夜間）パトロール】として立ち上がった。自分達の町の安全は、自分達で守るという気持ちで、地域に住む人々が協力体制を構築した。

当初は有志参加ということでの取り組みであったが、平成元年度からは地域内の9町内会自治会からの参加に加えて7名の有志により平成10年11月末迄に750回余実施した。初めは、毎週土曜日と日曜日の午後10時からの実施であったが、そののち金曜日、土曜日に変更した。

1回あたり4～5名に参加をお願いし、スケジュール等は関係者に〔参加お願い表〕を配付している。集合と共に、点呼確認及び状況報告等の後、小、中学校校地内及び地域の公園等への巡回を基本としているが、地域住民からの通報等により随時変更することもある。

約1時間のコースの間に地域のことや、趣味のこと等も話し合いながらのパトロールである。

また、随時高蔵寺幹部交番等のご指導も頂いている。

これらの取り組みに対して、これ迄《愛知県知事》《愛知県防犯協会連合会長》《春日井警察署長》《春日井市民の誓い実践協議会》等から感謝状を多数頂いている。

各町内会、自治会からの参加状況も色々で、

- ・ 1～2名の方々が交替で対応、
- ・ 組（班）長が順番に。但し、高齢世帯や世帯主が単身赴任の場合は除外、
- ・ 有志及び町内会等の参加は月2～3回程度であり、当初からの参加者は3名である。

参加したことをきっかけとして、町内会、自治会の役員の任期終了後にも有志として引き続き協力して頂いている方もおられる。

集合地点の近くに学習塾があり、夏季には

帰宅促進も行い、無灯火走行自転車への点灯呼びかけ街頭消火器や防犯灯の点検、さらには公園遊具等の点検等々も行っている。

これ迄に、スーパーストア工事現場のガス漏れを発見し、関係先に通報して事無きを得たこともあった。

駐車車両のルームランプ消し忘れへの対応や乗り捨て放置自転車を持ち主に連絡したことも数多く、そのことに関連して【持ち主の記名及び電話番号の記入呼びかけ】も地域内へ広報を図った。

放置自転車の持ち主が特定でき、連絡した場合の相手の反応もまちまちである。

「是非、貴方のお名前を教えてください。」と好意として受け取っての対応もあれば、「そちらへ行くのは大変です。届けて頂けませんか」とか「ゴミとして出しました。関係ありません。」と手荒く電話を切られ、がっかりしたこともあった。

こんなことばかりでは無く、ほのぼのとした機会もあった。

「是非貴方様のお名前を教えてください。」と言われたが、「私達は名乗らないことにしています」と断ると「他人に親切にして頂いたことを母に報告した場合、貴方様のお名前を聞いておかないと、叱られます」とのことであった。素晴らしい家庭であることが伺われる。

服装、装備は当初はヘルメットと腕章を用意したが、平成4年度に自治総合センターから【コミュニティ物品助成】を頂いた折りに防寒服と強力ライトを購入して頂いた。また夜光性たすき等は春日井警察署等から貸与して頂いた。

### （3）情報紙の発行と防犯への取り組み

このような継続実施の効果の一つとしては、【情報の受・発信機能】を果たしていることにもある。

地域内外にて発生の不祥事等について情報を寄せられることがあり、これらを関係先に通報、連絡等を行い、注意を喚起することにより、再発防止にも心掛けている。

犯罪発生速報等の発行・配付は発生情報入手の都度行っている。お知らせ速報版等を作成して、地域内外関係先に配る。

新聞配達の方から、「早朝たむろしている少年達の様子がおかしい」とか「深夜帰宅途中バス停留所から追尾の男性に抱きつかれた」等々である。このような情報を地域内外に流すと共に、防犯ブザーやガードネットの幹施を行った。合わせて交番へはパトロール強化を要請した。

平成5年夏／深夜に「中学校のプールで3～4名が泳いでいます」との電話通報を受けパトロールメンバーに連絡し、3名にて赴き帰宅を促したこともあった。

地域内外に対する広報・協力呼びかけには平成3年12月から月1回発行している、コミュニティペーパー『石尾台ニュース』の果たす役割は大きく、平成6年2月No.27からは高蔵寺幹部交番他から情報提供をして頂き、セーフティマイタウン／コーナーとして〈生活安全情報〉を掲載している。

『石尾台ニュース』は、毎月1日付けにて地域内の全世帯約1500及び地域内外関係先分約200～300合計1700～1800部発行している。地域の主婦の書きにより、イラストも多くオレンジ色のB4サイズの再生紙に、小学校の印刷機を使用させて頂いての

発行である。

配付は、春日井市の広報紙と共に11町内会、自治会の110の組（又は班）を通じて行い、外部関係先へも送（配）付している。また、必要により号外を15日付けにて、B5かB4サイズにより追加発行することもある。

【防犯懇談会】【防犯のつどい】を開催したこともあった。その折りには、〔門灯、玄関灯等の深夜点灯〕の申し合わせを行ない、〔防犯ブザーの幹施紹介〕、〔状況の報告及び取り組みの紹介〕、〔愛の（夜間）パトロールの実施状況の報告及び参加協力の呼びかけ〕等を行った。

平成6年4月から地域内に【防犯連絡所を設置】し、その方は防犯連絡責任者として春日井防犯協会連合会長（市長）から委嘱を受けており、現在は地域内バランスを考慮し15カ所に設置している。委嘱を受けている方々は、民生委員／児童委員、自宅開業医、自宅開業店主、町内会長、老人憩の家（責任者は老人クラブ副会長）等々広範に及んでいる。

他に平成5年6月に〔春日井市安全なまちづくり協議会〕が設立され、平成6年3月から地域内の5名が推進員として委嘱されている。住民有志が交番に出掛けての高蔵寺幹部交番との【ふれあいトーク】を随時開催している。

これ迄、民生委員、児童委員、町内会、自治会長、防犯連絡所責任者、『石尾台ニュース』編集メンバー、愛の（夜間）パトロールメンバー、高校生、主婦、熟年の方々等にご参加頂いた。これは、交番機能の理解と住民の意見提案及び情報交換がねらいで、平成6年4月から年間2～3回これ迄11回開催し

ている。

#### 4. 官・学・メディアとの連携と各種事業の展開

##### (1)官・学・メディアとの連携

これらの取り組みが『平成6年度警察白書』で紹介された。

また、愛知県警察本部と生活安全総務課の企画による【防犯連絡所活動紹介ビデオ——みんなでつくろう 安心の町／地域安全活動の推進——の作成】にあたって活動場面の収録に協力した。

その後、NHK教育テレビ「週刊ボランティア」にて全国に放送されたり、全国防犯協会連合会の企画による【地域安全活動推進ビデオ（いまボランティアたちは）】にも収録された。

また、平成7年1月に発生の阪神・淡路大震災を契機として、地域における自主防災の在り方を考え、非常時に備える為に広く地域に呼びかけて、懇談会を4回、協議会を5回、説明会を2回開催して、平成8年3月に地域を7分割して【石尾台地区自主防災会並びに同連合会を設立】し、発会のつどいを開催した。

これ迄、市内各地域で単位自主防災会が150程設立されたが、地域（校区）全体が一つとなつての設立は最初であり、意義あることだと市当局から賞賛を頂いた。コミュニティの真髄、正にここにありの思いである。

非常時に於ける、「自助」・「公助」そして「共助」の在り方を確認し、コミュニティが外部との連絡調整を図る為の連合会機能をもってことにあたることとし、推進員・協力員制度を導入した組織にしている。

今後の展開としては、【各種の講習訓練】【貸与物品の点検及び整備】【安全意識の啓蒙、啓発】等を予定している。

平成元年には、現在では全国で実施されている【[学校週5日制]に対するモデル試行の指定】を当地域の小、中学校が受けた。全国9道府県74小、中、高等学校、幼稚園の内の2校で、愛知県の都市部を代表しての指定とのことであった。

調査研究を重ねて準備がなされ、平成2年6月に第1回のモデル試行が行われた。当初は月1回第2土曜日の実施であったが、平成3年度からは第2、4土曜日の月2回に実施することになった。このモデル試行を地域コミュニティ活動にどのようにリンクさせるかを課題として、学校側や教育委員会とも話し合い、時にはこれに関連するテーマで講話（事例紹介）に各地からお招きを頂いた。

これ迄のコミュニティ活動の実施日をモデル試行の日程に合わせると共に、地域内有志による支援グループ〔にこにこくらぶ〕が発足したことを受けて、支援をした。これらのことが理解され、平成5年度には愛知県教育委員会の制度としての【家庭教育地域活動推進事業の地域指定】を春日井市教育委員会から受けた。

地域内の関係者に学校長も加えて〔家庭教育地域活動推進会議〕を設置して、【家庭教育講演会】を始めとする各種事業を展開した。当初2年間の指定予定がさらに延長され、都合4年間の取り組みであった。

平成8年度にはこの間の取り組みを「学校週5日制と地域の関わり」として発表する機会を頂いた。このことがきっかけとなって、現在もコミュニティからの支援を継続してお

り、10年度も昨年迄と同様、石尾台小学校PTAの主催事業【文化のつどい】に対して資金援助という形で後援している。毎回、児童と共に地域の人々が音楽観賞や観劇をする楽しいふれあいのひとときとなっている。

## (2) 少子高齢化及びシンボルマークの制定

当地域は極端な少子高齢者化傾向にある。最多時には約1,300名の児童が在籍した為に、2校に分割され800名と500名となった。両校とも、児童が減り続けて現在ではそれぞれが200名余となった。最近では、新入児童が20名程度であり、2～3年すると全校児童が150名以下となることも推察される。

その反面、高齢化は確実に進行している。平成10年4月現在、9.43%であり、春日井市全体の11.13%に比べて1.7%低いものの、ニュータウン全体の中では、一番高くなっている。このことの主な原因は、持ち家主体の地域ということである。さらに最近では、呼び寄せ（呼び寄せられ）老人も多く、さらに高齢化に拍車がかかっている。

平成4年に春日井市における最初のものとして自治総合センターから【コミュニティ物品助成】を受けたことは既に記したが、そのことを記念して【シンボルマークを制定】した。それについては【石尾台ニュース】等により、地域内にPRし、応募の呼び掛けをした。23点の応募があり、小学校長を始め関係者による審査会を実施した。審査委員長は地域内のプロ（グラフィックデザイナー）の方をお願いし、高校生の作品を補作して頂き、決定した。

その後は、『石尾台ニュース』のタイトルに

使用したり、サイズの異なる旗を3種5点作成して事業展開の折りに活用している。

また、平成6年に愛知県下で開催された、わかしゃち国体の折には【石尾台地区民泊協力会活動】を行なった。5月に協力会を発足し、参加呼び掛けをする為に、先ず【花いっぱい運動】を展開した。

平成4年10月に山形県で開催された「べにばな国体」の折りに、先催地視察をさせて頂く機会に恵まれ、取り組みを決意した次第である。春日井市内には、ホテルや旅館等が少なく全国から訪れる選手、関係者の全てに宿泊して頂くことが出来ず、それをカバーする為に市内の公共施設の一部とか公民館等を市民の協力を得て使用することになった。当地域では〔老人憩の家〕を宿泊場所として対応することになった。

【花いっぱい運動】の開始以降、本番の10月迄の5ヵ月間、地域内に200個を超すプランターとサルビアの苗を配付して丹精込めて育てた。このサルビアは後に記す選手の皆さんとのふれあいに有意義に活用した。

## (3) 他地域との交流

9月には春日井市国体実行委員会から宿泊チームの決定通知を受けた。【協力会の設立】と共に、実行委員会に「宿泊チームは是非沖縄県を含む九州ブロックの代表を」とお願いしておいた。このことは、既に記した〔石尾台中学校女子バスケットボールチーム〕が沖縄県で受けた心配りをお返ししたいとの思いによるものである。

そのことが実り九州文化学園高等学校（女子）バレーボールチームの皆さんにお越し頂くことになった。当初は、関係者も含めて



23名であったが、序々に増えて最後には29名になった。上記チームの皆さんを迎え入れるための色々な準備を着々と進めた。

10月いよいよ本番を迎えた。選手団の到着を多くの関係者が出迎え、宿舍の庭で歓迎のセレモニーを行なった。練習会場として、中学校の体育館を借用し練習の見学もした。

中学校体育館で行った【歓迎・激励会】も盛会であった。そのための色々な工夫をした。密かに同校校歌の譜面を取り寄せてその折りに演奏した。このことについては、偶然のことであったが、実家が同校に関わりの方がある方が【協力員】としておられた為にできた企画であった。

突然のピアノによる校歌演奏には選手はもとより学校関係者もびっくりしたようである。試合時には実に多くの人々が応援に出掛けた。順調に勝ち進み、いよいよ優勝戦に駒を進めることになった。

地域全体が沸きに湧いた5日間であった。

優勝戦の後にふるさと佐世保市へ会場から直接帰られる為、最終日には簡単な送別会を宿舍の玄関前で行なった。勝ち栗を入れた赤飯のおにぎりを差し入れた方もおられた。会場の盛り上がりも凄いものがあった。「ゴーゴー九文！ レッツゴー九文！」の応援コールが会場内に轟いた。勝ち上がるにつれて、応援団もさらに多くなり、大きなパワーとなった。

優勝戦には佐世保市からも選手の父母や学校関係者に加え、県関係者も多数来られ、一層大きな心温まる応援の輪が広がった。その甲斐あって優勝してくれた。

これ迄にインターハイで優勝したことはあるものの、国体での全国制覇を果たしたこと

がなかったので、今回夢であったそれを果たすことができ、翌年創立50周年を迎えた同校には大きな喜びとなった。優勝決定と同時に急遽会場を確保して行った【ミニ祝賀会】では地域の人々も感涙にむせび、選手や関係者との別れを惜しむひとときであった。

万感の思いを込めて「ありがとう そしてさようなら 今後のご活躍を期待します」と送別の辞を述べたことを覚えている。この折りの選手の中には、その後実業団チームに進んで活躍しておられる方もあり、嬉しい思い出である。

私は、昭和54年8月に「自分の家を造ると共に地域コミュニティを作る」という住宅都市整備公団（当時は日本住宅公団）の企画による【グループ分譲制度】に応募し、推されて【建設組合理事長】に就任したことがきっかけとなつてのコミュニティの関わりから既に19年余、実に多くの体験をすることができた。民生委員・児童委員を始め春日井市の各種審議会や協議会の理事等の委嘱を受け、意見を述べさせて頂く機会も多くなった。これからの人生設計を思索した結果として、これ迄約40年勤務した企業を定年を待たずに退職したことにも関連して、人生の楽しさを満喫している。

### おわりにー今後の決意

これ迄の体験の中から、こんな思いを持ち続けたいと思う。

1. どうせやるなら、一生（所）懸命。  
地域のこと等に最大限関心と関わりをもって取り組む。
2. 継続は力なり、継続性の確保を工夫する。

3. ネットづくりとそのワーキング。

即ち、ネットワークづくり。

まさに漁師が投網を打つ如し。

幾ら立派な網でもそれを使う人の力量によって収穫に差が出る。

色々な出逢いにおけるふれあいのネットを如何に活用して、どのように成果をあげるかを常に念頭においている。

私はつなぎ屋さんを自認している。

ネットワークづくりは、地域内、地域外さらには行政関係にも及び、人々が持つ特技、即ちノウハウの引き出しも視野に入れている。

4. リーダーは率先垂範。

【愛の（夜間）パトロール】を始め色々な活動を率先して実行している。

5. ちょいとボランティアそしておおいにボランティア。

即ち、ちょいボラとおおボラである。

広範な地域の多様な活動に住民の方々に少しでも関わって頂くことにより、地域を少しでも住みよくしたいと訴え続けている。

6. 私は常にあらゆる機会をとらえて、「この指（に）とまれ」と言いつづけ、実践している。

最近では、4月から9月にわたり中日新聞近郊版に63回にわたって連載された高蔵寺ニュータウン入居開始30周年記念企画記事〔高蔵寺ニュータウンの光と影〕に紙面登場された方々に呼びかけて【ふるさと高蔵寺の光と影を語ろう会（略称、語ろう会）】を結成し取り組みを開始した。

これには多くの反響もあり、確実な手応えを感じている。また、常に活動への人びとの

対応割合について【2・6・2】という思いを念頭に置いている。

われわれの活動経験によれば、色々な提案や取り組みに対して前向きに共鳴して頂ける方は20%、状況判断の結果という方が60%、どんな場合でも関わりたくないと思う方が20%だということである。状況によっては、60%の人々が前の20%に移り3・5・2になることもありうる。

これからもコミュニティ活動を色々な場面で展開することに関わりを持つ時、これらのことを念頭に活動したいと思っている。